

従来の枠にとらわれずに、 探り続けることが学び

常識を壊す。今私がもっとも意識していることです。自分のレベルや競技の枠にこだわらず、誰も考えないような挑戦をすること。東京オリンピックの1500mで8位入賞を果たせたのも、結果ではなく挑戦に主軸を置いていたからです。

オリンピック出場を目標とせず、より速くなること、自分の能力を高めることを考えて走り続けた結果、オリンピックになりました。得意種目を絞って勝負する選手が多いけれど、勝てる可能性のある種目をやめる必要はないというのが持論。可能性のある種目はいけるところまでいこうと取り組んできました。

1500mという上位進出が難しい種目で決勝まで進んでいく。それは大きな挑戦であり、実現できればきっといろんな人に驚きを与え、自分自身もワクワクできるはず。その気持ちがあったからこそ、得意の5000mで予選落ちしても1500mを楽しんで走り、最高峰の舞台で自分の未知の力を発揮することができたのだと思います。

常識を超えた発想には、同志社大学の学びが生かされていると感じています。自主自立を重んじる校風にひかれ、スポーツについて

幅広く学びたいと考えて同志社大学のスポーツ健康科学部を選びましたが、創立者・新島襄先生の「倜儻不羈」という言葉に出合ったことは大きかったです。「常軌を逸している人こそ大事にしろ」という意味で、同志社大学には、個性を受け入れてくれる大きな器があるのです。

固定観念をもたないことの重要性は、受講したどの科目でも度々出てくるメッセージでした。もう一つ学んだのは、結果よりも過程に重きを置く姿勢。この二つは、競技に取り組むスタイルに影響をあたえてくれました。従来のやり方をなぞるのではなく、新しい方法や目標を自分で考え、見つけてやっていくスタイルを確立することができました。

スポーツ健康科学部の、専門分野を一つに決めず、スポーツ全般を学びながら興味のあることを見つけて極めていけるカリキュラムも魅力です。自ら関心をもってたどりついた専門的な学びを極めつつ、これまでの自分を超越するための考え方も身につける。そうやって、自分にしかできないアスリートのスタイルを追究し続けた4年間だったといえます。

大学では、陸上部に入らず独自の練習をしていましたが、所属をこえて、人としてのあり方の部分が尊重されているのを感じていました。学生同士も尊重し合い、居心地が良く、競技にのびのび取り組めたことも、結果につながったかもしれません。

大学に入学するまでは、強くなるための正解があって、そのノウハウを学ぶと思っていました。けれど正解はなく、自分が強くなるためにどうすればいいのか、どんな人生を送りたいのか、従来の枠にとらわれずに考えること、探り続けることが学びであると気付かされました。これからの人生に学びを落とし込んでいくことを、楽しみにしています。

Doshisha's Life
TANAKA Nozomi

陸上競技選手・New Balance所属

田中希実

1999年、兵庫県生まれ。2022年、同志社大学スポーツ健康科学部卒業。陸上女子1000m、1500m、3000mの日本記録保持者。東京2020オリンピックでは、女子1500m、5000mに出場。1500mで8位入賞を果たす。

